

解答のヒント

■今回のねらい

今回の講座のねらいは2つあります。1つ目は、近年、現代文や小論文で頻出の「共助」という考え方について理解を深めることです。そして2つ目は、発想を広げにくい課題文への対処法を学ぶことです。

■記事の内容の確認

ではさっそく、記事の内容を確認しつつ、「共助」という考え方について一緒にみていきましょう。今回の記事は、2018年6月18日に起きた大阪府北部における大きな地震の直後に、自治体が混乱するなか、「地域が支え合う『共助』の力が発揮されていた」ことを報じています。

記事の内容をより深く理解するために、まずは「自助」「共助」「公助」というキーワードについて確認しておきましょう。これらは論者や文脈によって微妙に意味が異なる場合もありますが、おおまかなイメージは次の通りです。

☆「自助」「共助」「公助」の考え方

- ・自助…自分の命や身の安全を自分自身で守ること
- ・共助…隣近所や地域社会の人々が互いに助け合うこと
- ・公助…行政（国や地方自治体）による公的な支援のこと

ひとたび災害が起きれば、被害状況を確認したり、支援物資を配ったり、募金やボランティアの募集をしたり…と、多様な支援活動が求められます。その際、自治体は自衛隊や消防、警察などを動員して事態に対処しようとはしますが（＝公助）、それで全てをカバーすることは困難です。また、個人も防災グッズや備蓄などを活用してある程度対応できますが（＝自助）、体が不自由な場合や、電気・ガス・水道などの生活の基盤（インフラストラクチャー）が使用不可の場合にはどうにもならない局面も出てくるはずです。

そこで近年重要視されているのが、地域の人々が互いに助け合う「共助」という考え方です。共助は、災害時において、自助や公助だけでは満たすことが難しい多様なニーズに対してすばやく柔軟に応えることができると期待されています。

実際、今回の記事によれば、被災地域の自治会が被害状況をすぐに確認して、ブルーシートの配布や災害ゴミの回収などの段取りを整えたそうです。また、地元の民間団体も、被災地に届いた水や食料などの支援物資を個々の被災者に渡す役割（仲介役）を担いました。この団体は同時に、一般の人々と高齢者・障害者との間に「情報格差」という現場の実

態を把握することもできました。その他、ボランティアや民生委員なども、高齢者の救出やインフラの復旧支援に貢献しています。

さらに、記事の最後の部分では、次の災害に備えて地域で「新たなつながり」を作ろうとする試みもあることが紹介されています。個人情報という壁に阻まれていた以前の状況とは異なり、昨今では地域の「つながり」を大切に作る動きが生まれつつあることがうかがえます。

☆記事のポイント

- ・先の大阪北部地震の直後、個人や行政が混乱するなか、地域の人々が助け合う「共助」の力が発揮され、自助や公助で対応困難な部分を地域社会がカバーしていた。
- ・次の災害に備えて、地域の「つながり」を新たに作りだそうとする試みも行われている。

■どのように発想するか

さて今回の問題、書きやすかったでしょうか、それとも書きにくかったでしょうか。小論文の勉強がある程度進んでいる人でも、今回の問題は書きにくいと感じた人が多かったのではないかと思います。なぜなら、**課題文（記事）が何らかの「問題」だけでなく、それに対する「解決策」をも提示してしまっている**からです。

たとえば、かりに今回の記事で〈災害が起きて個人や自治体が混乱した〉という「問題」のみが述べられていれば、そうした混乱を回避するための「解決策」を述べる、という方向で答案を書くことができます。その場合、〈共助が大切だ〉〈情報共有のあり方を見直すべきだ〉〈募金やボランティアの招集をすばやく行う仕組みを作るべきだ〉など、対策を自分なりに考えなければなりません、少なくともやるべきことは見えています。

ところが、今回の記事は〈災害が起きて個人や自治体が混乱した〉という「問題」だけでなく、〈そこで共助がうまく発揮された、そして今後も様々なつながりが生まれようとしている〉という「解決」の部分まで書かれてしまっています（むしろこちらが中心です）。この場合、どのように取り組めばよいのでしょうか。絶対にこれで大丈夫というやり方はありませんが、考えるためのヒントはいくつか挙げられます。

【ヒント① 《問題→原因→解決》の流れを意識する】

社会問題について考えるときの一つの方法として、

- 1、「問題」…それがどのような問題なのか（what）
- 2、「原因」…なぜそのような問題が起きているのか（why）
- 3、「解決」…どうすればその原因を克服し、解決に向かうことができるのか（how）

という3つの観点を順に考えていくというやり方があります。今回の記事に当てはめて

みると、

- 1、「問題」…災害が起きて個人や自治体が混乱した。
- 2、「原因」…（大地震？）
- 3、「解決」…共助の力が発揮された。今後も様々なつながりが生まれようとしている。

のようになりますが、「原因」の部分はまだ考察の余地がありそうです。というのも、一般に、ある問題の原因は一つとは限らず、難しい問題ほどその原因は複雑で複合的な場合が多いからです。

たとえば今回の場合、社会に混乱を招いた原因は単に大きな地震が起きたことだけではなく、〈人々の間に情報が十分に行き届かなかったこと（情報格差の問題）〉も挙げられます。高齢者や障害者、外国人など、地域には多様な人々が住んでいるため、単に防災無線やインターネットがあればよいというわけではないのです。このように考えてくると、人々の間における情報格差を解消するために「共助」という考え方をどのように活かすことができるか、という論点を見いだすことができるでしょう。

ただし、課題文によっては「問題」「原因」「解決」の3セットが全てそろって言い尽くされており、これ以上何を付け加えればいいのか分からないという場合もあるかもしれません。そこで次の方法が考えられます。

【ヒント② 課題文を疑う】

「課題文の内容を無批判に受け入れるのではなく、疑問を差しはさみながら読み解く」ということは小論文問題を解くときの基本でもあります。正論が述べられているように感じられても、本当にそこに疑問を付す余地がないかどうか考えてみるのが大切です。

たとえば、今回の記事の見出しに「『共助』の力 災害時こそ」とあります。ここであえて、「いや、共助の力は（災害時だけではなく）日常においても大切ではないか、むしろ日常において十分に実現している共助こそが、非常時にも生きるのではないか」と切り込むことも可能かもしれません。共助は非常時に突然現われるものではなく、日常の中に根ざしてこそ発揮されるものだ、という発想です。この場合、日常においてどのような共助のあり方が可能か、またそのなかで育まれるどのようなものが非常時に生きるのかを説明していくとよいでしょう。

それでもやはり、課題文の内容が正論過ぎて疑問の余地がない、または疑問を付したとしても有意義な論述ができる自信がない、という場合もあるかもしれません。その場合には次の方法を試みてみましょう。

【ヒント③ 課題文の主張の意義を自分の視点から捉え直す】

課題文が真っ当なことを述べており、自分もそれに賛成する場合には何を書けばよいのか分からない——このように悩んでいる人は多いと思います。その場合は、課題文で主張されていることの重要性について課題文とは別の視点から説明する、という方法が有効です。

たとえば、今回の記事で示されている共助について疑問や反論が思いつかなかったとします。その場合、共助の重要性について、それを必要とする社会背景などを探りながら自分なりに考えをまとめてみるというやり方が可能です。あえて言えば、「なぜ、いま共助が重要なのか」という問いを提起するということです。この場合、自助・共助・公助に対して私たちがどのように向き合ってきたのかという点について、個人化などの現代社会の傾向と絡めながら述べ、自助や公助の限界を指摘できるとよいでしょう。

この方法は知識を必要とするケースが多く、やや高度な論じ方ではありますが、ここまでできるようになるとかなり多くの小論文問題に対処できるようになります。

■まとめ

ではまとめに入ります。今回の講座のねらいに沿って説明すると以下ようになります。

○「共助」とは何か

＝自分で自分の身を守る「自助」と、行政による「公助」の中間に位置し、地域住民、地縁組織（自治会等）、民間団体（企業やNPO等）など、地域社会に携わる多様な人々が互いに助け合うこと。

○「問題」だけでなく「解決」をも書かれてしまっている課題文からの発想の広げ方

- ①《問題→原因→解決》の流れを意識して、自分なりに原因を提示したあと、課題文で示された解決策がどのようにその原因を克服するかを考える。
- ②一見正論に思われる文章でも、本当に疑問を差しはさむ余地がないかを考える。
- ③課題文で示された考えの重要性について、課題文とは別の視点から論じる。

特に後半の発想の広げ方については、今後様々な小論文問題に取り組むときは是非意識してみてください。きっと、自力で解ける問題の幅が広がっていくはずです。今回は以上です。おつかれさまでした。

（篠原 圭佑）